Japanese association of educational psychology

発　達　1-PA10

乳幼児期における自己および他者理解の発達(3)
－24カ月時の自他理解とふり遊びとの関連性－

○保崎路子（お茶の水女子大学）・坂上裕子（東京大学）・常田秀子（東洋大学）
遠藤利彦（聖心女子大学）・無藤隆（お茶の水女子大学）

【問題と目的】　２歳前後になると、子どもは様々な形でふり遊びや見立て遊びを見せるようになる。すなわち、徐々に自らが仮想した非現実的状況の中で遊ぶことが可能になるのである。この時期におけるふり遊びの意味を、殊の外重要視する論者の１人にLeslie(1988,1994)を挙げることができる。彼は、ふりの成立を、自己や他者の心的状態（殊に自他の信念）に関する理解の原初的現れであると解し、“心の理論”の始原を従来よりも早い２歳前後に置いて考えている。これに関する他の論者の見方は未だ定まってはいないが、少なくとも何らかの表象システムがふりの成立を支えていることに疑いを立てる余地はなかろう。それでは、こうした複雑なメカニズムの関与が想定されるふり遊びに、自己や他者に関する理解は無関係であるのだろうか。特に、自己や他者が独自の意図性を有し、行為の発動主体であることの理解は、遊びの中にどのような形で現れるのだろうか。仮想的状況でのふり遊びには、現実の手がかりをあまり利することなく、表象空間の中に自己の発動主体性および一連の行為についてのプランを組み立てることが必要となる(Leslie,1994)。元来、本研究が自他の発動主体性に関する理解の指標として用いているPipp et al. (1987)の測度は、徐々に複雑さを増す行為の連鎖の中で、自己と他者の発動主体性を取り違えることなく、適切な形で行為を完遂し得るか否かを問題にしたものと言い換えることができる。その意味で、遊び、殊にふり遊びとPippらの測度で測られる自他の発動主体性の理解との関連を明らかにすることは興味深いことと言えるのではないだろうか。この(3)では、ふり遊びが現れ始め、また相対的にその個人差が大きいことが想定される24カ月段階を特に取り上げ、この問題を検討する。

【方法】　◇観察対象：24カ月児27名。◇手続き：a)自己および他者（母親）理解に関する実験－(1)で既述。b)玩具（おままごと道具）を用いた母子の自由遊び場面（教示は特になし）を録画し、そこから一律に（開始直後を除く連続した）５分間をランダムに抽出した。そして、その５分間を５秒ごとに区切り、それごとの遊びのレベルを、子ども・母親それぞれについてFiese(1990)のふり遊びの分類案（以下の４段階）を参考に評定し、さらに各レベルごとの集計を行った。

①遊んでいない－相手を傍観しているなど。
②単純な探索行動－玩具を探す、いじくるなど。
③機能的な遊び－例えば玩具の野菜を切る、くっつける、鍋にふたをする、およびそれらの行動に対する言葉かけなど。
④表象遊び－例えば食べるふり、焼くふり、およびそれらの行動に対する言葉かけなど。

＊玩具の名前に関する質疑（これなあに？－にんじんだねなど）は、今回の分析では③に含めた。

【結果と考察】　自己と母親の発動主体性に関する子どもの理解度と、子どもと母親それぞれの各遊びレベルの総計（５分間の相互作用中に、各遊びレベルに該当する５秒ユニットが総計いくつ見られたか）との間にどのような関連性があるかをピアソンの単相関係数を算出することで検討した。結果は下表に示す通りである。自己の発動主体性に関する理解と、子どものレベル２の遊び（単純な探索的遊び）との間に有意な負の相関($r=.-52$, $p<.01$)が、また、子どものレベル４の遊び（表象的ふり遊び）との間に有意な正の相関($r=.56$, $p<.01$)が認められた。これは、自己の発動主体性に関して高い理解を示す子どもほど、自由遊びの中で、ただの探索など単純な遊びが少なく、一方、より複雑な表象的ふり遊びを多くしているということを意味する。複雑な行為のやりとりの中で自己の意図性や発動主体性に関する意識を明確に持ち得ることは、ふりを始めとする高次の遊びの成立に重要な役割を担っているのかも知れない。

	自己理解	母親理解
－子ども－		
level.1(傍観)	.28	.24
level.2(探索)	－.52*	－.25
level.3(機能)	－.26	－.18
level.4(表象)	.56*	.31
－母親－		
level.1(傍観)	－.23	.06
level.2(探索)	.07	－.17
level.3(機能)	－.25	－.20
level.4(表象)	.32	.18

* $p<.01$

NII-Electronic Library Service